

異学年集団を基盤にした総合学習単元開発の試み

—「なかよしワンダーウォーク」の活動を通して—

長谷川 雄 一 (岡崎市立岡崎小学校)

久野 弘 幸 (生活科教育講座)

(2004年10月25日受理)

Curriculum Development for Integrated Studies based on multiple-graded group

-A case study of "Wonder walk activities" at Okazaki Elementary School-

Yuichi HASEGAWA (Okazaki Elementary School)

Hiroyuki KUNO (Div. of Life Environmental Studies)

要約 平成10年の学習指導要領の改定以来、総合的な学習の時間の単元開発はさまざまな実践が試みられている。岡崎市立岡崎小学校では、1年から6年までの「異学年集団」を総合学習の学習集団として編成することにより、次に挙げるような成果を生み出すことができた。たとえば、従来の外部講師や同一学年の子供との関わりに加えて、異年齢の子供との関わりを深められること、学年間の視点の異なりや調査・追究活動の力量の差を学習活動に生かすことなどである。

Keywords : 異学年集団, 総合学習単元開発, 「なかよしワンダーウォーク」

はじめに

岡崎市立岡崎小学校(以下、本校とする)では、平成11年より、研究主題「生き生きと輝く子供たち—地域に広がる『なかよし活動』—」を掲げ、学校、地域、家庭が一丸となり、心も体も健やかな子供の育成を願って、日々実践を積み重ねてきた。中でも心豊かに思いやりを持って仲間作りができる子供を育成するために、異年齢集団活動を効果的に取り入れて児童会活動や学校行事の活性化を図ってきた。

全校児童を6つの縦割りグループに分け、この活動を「全校なかよし活動」と呼んだ。まず4月に「なかよしグループ結成集会」を開催し、「なかよしグループ」の多彩な活動への意欲化を図る。この集会を機に、5月に「なかよし運動会」、7月に「なかよし給食」、10月に「学区のお宝探しスタンプラリー」、3月に「なかよしお別れ集会」など計画的に活動を展開してきた。中でも、「学区『お宝』探しスタンプラリー」では、生活科や総合的な学習の視点から地域内の魅力ある素材をもとに問題を出し、子供たちが、その問題(お宝)を求めて学区内を歩き回り、自分の学区をあらためて見直す機会としてきた。

学習指導要領の改訂を踏まえ、本校では、3年前より研究主題「気付き、深め、表現できる子の育成」を掲げ、子供たちの「生きる力」を育む舞台として特色

ある学校作りを推進してきた。この活動の中で、生活科と総合的な学習の素材を身近な地域に求め、仲間同士のかかわりの中で子供たちに強い思いを持たせ、「生きる力」を育むことを願い、前述の「なかよしスタンプラリー」を「なかよしワンダーウォーク」とし、身近な地域から課題を見つけ、解決を図る総合的な学習としての新たな学習形態の創造を目指すことにした。

1. 研究主題の設定

(1) 新しい教育課程と「育てたい力」の育成

子供たちは、自分の弱さを克服したり、友達と協力し合ったり、異なる考えを持った人の存在を知って、逞しく生きる力を身につける。しかし、今日の社会状況の中では、このような力を身につけるのは難しい。この背景のひとつは、中央教育審議会の答申で指摘されている通り、異年齢集団における、かかわり合いが日々の生活の中で希薄になってきたことをあげることができる。

21世紀を担う子供たちをどのように育てたらよいか。中央教育審議会は、「これから求められる資質や能力は、変化の激しい社会を<生きる力>である。」としている。それは「自分で課題を見つけ、自ら考え、主体的に判断し、問題を解決する能力」であり「自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動

する心など豊かな人間性」を意味している。

この生きる力の表出を「気付く(感じる力)」「深める(創り出す力, かかわる力)」「表現する(実現する力)」にとらえ, それらを育成するために, 学校, 地域, 家庭が連係・協力をより強めていくことが, これからの重要な課題となると考えた。

(2) 学区の地域的特性と児童の実態

①地域的特性

本校を取り巻く地域は, 歴史が古く由緒ある寺社や遺跡など文化的遺産が多く, 占部川, ギロ川, 砂川の3つの川, 田, 畑, 雑木林など, 自然環境に恵まれている。JR東海道線岡崎駅を中心に古い町並みや商店街, 南公園などの公共施設が隣接している。

このように, 子供にとって, 自然環境に恵まれ, 学習素材が豊富な地域と言える。

②児童の実態

児童の現状として, 核家族化, 少子化, 高齢化などの社会の変化に伴って, 人とのかかわりが希薄化している。それ故, 地域の人々とのかかわりも友達と遊ぶ時間も少なく, 仲間を作りにくい。子供たちの様子を見てみると, 高学年の子供が下学年の子供の世話をしたり, 手本となるような態度を示したりするというような光景があまり見られない。低学年の子供も高学年の子供の姿を見習って, 自分も高学年の子供たちを見習おうとする態度があまり見られないと感じられる。

(3) 地域と仲間が果たす役割

①すてきな地域

地域素材には次のような価値を見出すことができる。

- 地域素材との出会いの中で, 子供たちが共感したり感動したりして, 自分たちの生活を見直すことができる。
- 身近な教材であるため, 繰り返しかかわることができ, 容易に見たり聞いたり確かめたりすることができる。自分の力で主体的に学習を進めることができる。
- 地域の事象に対して知的好奇心を持ってあらためて見直そうとする態度を培い, 自分とのかかわりから自分の成長を実感することができる。

保護者や地域の人々は, 学校に大きな期待感を持ち, 積極的に協力し, 地域全体で子供たちを育てていこうという意識が高い。このような地域の願いを受け止め, 上記の地域素材の価値を子供たちが感じることができるように, 地域素材を学習に取り入れ, 地域を見つめ直していく学習を進め, 「生活科」や「総合的な学習」を核として, 研究を進めてきた。地域を学び, 地域で学び, 地域に生かす子供を目指し, 子供の心の中に地

域への愛着と誇りを育てていきたい。

②すてきな仲間

異年齢集団活動には次のような価値があると考え

- 同学年の子供の思いやりやこだわりをふれていく中で, 自らの学びを深め, 広げ, 振り返ることができる。
- 上学年の子供は, リーダーの役割を果たしながら, 知恵を出し合い, 協力し合う体験をすることができ, 学習への自発性と粘り強さを培うことができる。
- 下学年の子供は, 上級生との出会いの中で, 自分の学びへの見通しを持ったり, 上級生のようにになりたいという願いを持ったりして, 学習への意欲を高めることができる。

本校では, 子供たちのかかわり合いの対象を「仲間」とし, この活動に次のような願いを託した。

子供たちは, 仲間の思いやりやこだわりをふれていく中で, 自らの学びを振り返ったりその学びを生かしたりすることができ, 学習を深めていくことができるだろう。また, 知恵を出し合い, 協力し合う体験をすることで学習への自発性と粘り強さを培うこともできるだろう。自分の学びの見通しや仲間のようにになりたいという願いを持つことで学習への意欲も高めることができるだろうと考える。

以上の検討から, 本校における実践研究の主題を「生き生きと輝く子供たち—地域に広がる『なかよし活動』—」と設定した。

2. 実践研究の視点

(1) 「4つの力」を育てる手だての構想

本校の総合的な学習で育てたい力(評価規準)を踏まえて, 新たに「なかよしワンダーウォーク」で育てたい力を4つの観点, すなわち「感じる力」「創り出す力」「かかわる力」「実現する力」で示すとともに, それぞれの手だてを明らかにした。

①「感じる力」を育てる手だて

「感じる力」を育てるための手だてとして, 「なかよしワンダーウォーク」の視点を定めることを心がけた。これは, 子供たちが登下校の道や身近な地域の草花や生き物に目を向けることにより, 地域を改めて見直し, 地域の良さを発見できるようにするためである。また, 五感の必要性を感じさせる体験的な活動を盛り込んだ課題づくりについても配慮した。

②「創り出す力」を育てる手だて

ミニなかよしグループ作戦会議を開催し, テーマを

解決するために、日程やコースを子供の力で考えさせたり、課題解決のために必要な情報が何かを考えて準備させることとした。

③「かかわる力」を育てる手だて

一人の力では解決困難なテーマ作りを支援し、かかわりの場を豊富にすること、また地域の事象や人にかかわることによって地域の良さや地域の人に触れさせることを重視した。

④「実現する力」を育てる手だて

「実現する力」を育てる手だてとして、発表の場を設定すること、集めてきた情報を整理し、分かりやすく伝えるための時間を保障すること、発表会でのワークショップやポスターセッションを通して、自分の活動を振り返り、今後の見通しを持たせることを心がけた。

(3) 発達課題を考慮した評価規準、目標、課題の作成

今回作成する「なかよしワンダーウォーク」の評価規準を踏まえ、発達課題を考慮し、低、中、高学年別の評価規準を作成した。低、中、高学年別の評価規準を基に、なかよしグループごとに、低、中、高学年別の課題、目標を立てることとした。

(4) 「全校なかよし活動」年間活動カリキュラムの作成

年間教育活動の見通しに立って、子供たちに活動の場と時間を保障し、児童会活動の中に効果的に異年齢集団活動を取り込むよう工夫するとともに、年間活動カリキュラムの中に、総合的な学習としての「なかよしワンダーウォーク」の活動を詳細に位置付けた。

3. 研究実践の考え方

(1) 総合的な学習に対する基本的な考え方

美しいもの、未知なもの、神秘的なもの、不思議なものに目を見張る感性が子供たちに生まれていくことに願いを込めて、総合的な学習における活動を「すばらしい」「素敵な」「不思議に思う」「目を見張る」活動として位置づけ、「ワンダー活動」と呼ぶことにした。感性を豊かにすることが、人間にとって何よりも大切であり、その豊かな心が、人と人のつながりを豊かにしていくことに結びついていくことを意味している。そして、この活動の時間を「ワンダフルタイム」と名付けた。

①課題を見つけ、学習対象に五感で迫る「ワンダーウォーク」

価値ある教材と出会うために、子供たちが自分の手足、五感を使って感じ取っていくことができる体験活

動である「ワンダーウォーク」を取り入れる。例えば、学校近くのギロ川のワンダーウォークを始めた子供たちは、素足で水の中に入り、川底の感触に思わず声を上げ水の中に入る瞬間の感覚の変化に驚いた。このように五感を使って川にふれることで、川と自分の距離が縮まり、ギロ川を豊かに感じることができるようになるのである。

②思いや願いを表現し、学びを振り返る「ワンダー集会」

単に疑問に思ったことや分かったことを発表するというだけではなく、子供たちの思いや願いを発信していく場として、「ワンダー集会」を設定する。子供たちは、この集会で歌や劇、詩や作文、ポスターセッション、ワークショップなど、様々な表現活動を用いることができ、子供たちの個性を大切にしながら多様な表現活動の場を保障した。

(2) ワンダフルタイムの4つの「仲間」

①同年齢の友達が仲間

学級や学年などの同年齢の子供同士が互いに意見を交換したり、かかわり合ったりする中で、対象に対するかかわりもより深まっていく。このように学習を進めていく中で、共に高め合っていく「仲間」である。

②異年齢の友達が仲間

学級や学年を越えた「仲間」との学習は、子供の興味・関心や学習経験などの多様性を生かすことにつながり、それぞれの学年での学びをより確かなものに行うことができる。

上学年の子供は、この活動を通して、学び気付きを深め、広げることができ、学びを振り返ることも可能となる。下学年の子供は、上学年の子供に共感したり憧れを持ったりして自分の学びをより高めていくことができる。

③外部講師が仲間

外部講師を招いて学習を進める中で、子供たちは、外部講師から新たな学びや気付きを得たり、心を通わせたりすることで、他者の思いやりやその子なりの考え方や感じ方にもふれていくことができ、自らを振り返り、自らの学び深めていくことができる。

④ひと・もの・こと全ての学習対象が仲間

子供たち同士の「仲間」とのつながりの中で、五感を使って対象にふれながら、対象と「仲間」になっていく。お互いの知恵を出し合いながらかかわり合う体験や、外部講師など地域の人とかかわる体験を、生活科・総合的な学習を進める上で、積極的に取り入れた。子供たちは、この体験を積み重ね、自らを振り返り、

自らの学びを深めていくのである。こうして自分以外の全ての対象と「共に生きる力と心」を育てたい。

(3) 「生活科」・「総合的な学習」における評価規準（育てたい力）の明確化

平成14年度，総合的な学習の大枠を「すてきな地域とすてきな仲間」と定め，その学習の中で身に付けさせたい力を「感じる力」「創り出す力」「かかわる力」「実現する力」の4つの観点に絞った。

この4つの観点を低，中，高学年別の発達段階にあわせ，さらに具体的な育てたい力として「岡小 生活科，総合的な学習で育てたい力（評価規準）」をまとめた。

(4) 新たな学習形態の創造を目指した「なかよしワンダーウォーク」

「地域のすてきを発見しよう」を共通課題として，グループごとに決めたテーマに従い地域を体全体の五感を働かせて楽しむ「なかよしワンダーウォーク」では，次のことが期待できる。

- 学区のお宝を求めてワンダーウォークすることを通して，地域への関心を高め，新たな目で地域を見直すことができる。
- 地域で体験したことを多様な表現方法でまとめたり，発表したりすることを通して，体験の共有化を図ったり，自分の学びを振り返ったりすることができる。
- 生活科・総合的な学習で得た学びや気付きの力を生かす場であると同時に，ワンダーウォークで得た力を生活科・総合的な学習で昇華させるなど，双方向的な効果が期待できる。
- 異年齢の子供がふれあい，かかわり合うことは，他者理解，自己理解の力を付けるためにも重要であると考える。下学年は，上学年に教えられ，支えられることによって学び，上学年は下学年にいかに優しく接し，教えるかを学ぶ。
- 「なかよしワンダーウォーク」では，学級や学年での学習では見落としがちな価値ある素材を取り上げることができる。
- 子供たちの多様な興味・関心に応えることができる。
- この活動を通して異学年と共に築き上げた学びが学年・学級に，または次年度の学習に生きることも期待できる。

4. 平成14年度の実践

前述の「育てたい力」を念頭に置いて，平成14年度，特別活動としての「なかよしスタンプラリー」から総合的な学習としての「なかよしワンダーウォーク」の

実践に踏み切った。

(1) ウォークの視点をめぐって

「なかよしワンダーウォーク」の実践にあたり，最も重要なことは，どのようなテーマに基づいてワンダーウォークを行うかという点である。始めに「地域のすてきを発見しよう」という共通課題を提示し，自分たちの追究したいテーマを決めた。テーマを決めるにあたって，次の視点を与えて子供たちが話し合えるようにした。

- 五感を使って体験できるようなこと
- 人とかかわりあえるようなこと
- 学区の中で日ごろ目にするものはあってもよく知らないもの

初めはとまどっていた子供たちだが，話し合いを始めてみると，いろいろなテーマが出された。

低学年の子供は，生活科の町探検をイメージしていたり，3年生以上の子供は，一か所で落ち着いて探求する活動を計画したりとグループによってさまざまであったが，子供たちの発想を生かしてワンダーウォークの視点を決定していった。

事例1：なかよしレッド1班の場合

I男のグループは，小さい子供たちも楽しく回って来られるように公園めぐりを計画した。しかし，ただ歩いてくるだけではワンダーウォークにならないので，何か視点を定めるよう助言をした。

その結果，I男たちはどの公園にもあるすべり台に着目し，その形やすべる楽しさを追究することになった。大きさの違うボールを2種類とストップウォッチを用意し，すべり降りるスピードから「スリル度」を決めて発表することに決めた。この視点によって，低学年から高学年まで役割を持ち，みんなで体験することができるようになり，何気なく遊んでいたすべり台が，興味を持ってかかわれる対象となっていった。

(2) ミニなかよし作戦会議

ワンダーウォークの視点が決まったグループから，当日どんな情報を集めてきて，どんな方法で発表するかを考えさせた。ポスター作り，寸劇，パソコンを使ったプレゼンテーションクイズ，参加形式のワークショップなど方法はさまざまだった。子供たちは，これまでに生活科や総合的な学習の時間で培ってきた発表の方法を取り入れながら考えた。

事例2：なかよしピンク2班の場合

M男のグループは図書室で「鳥居調べ」を始めた。低学年と一緒に図鑑を調べてみると鳥居には5種類の形があることが分かった。事前の学習で新たな事実を発見することができた。なかよしワンダーウォークを

する中で図鑑のコピーと照らし合わせてどの種類の鳥居かを明らかにしてくることとデジタルカメラを用意して鳥居の写真を撮ってくるのが決まった。時間内に効率よく回れるようにコースを決め、途中の休憩ポイント、昼食ポイントなども決定して地図に書き込んでいった。

(3) なかよしワンダーウォークに出かけよう

子供たちが安全に出かけられるように、教師の方でも実行委員会を持ち、主に安全面の準備を進めた。各グループの時間単位の動きや通過ポイントの把握、保護者にも協力していただいて危険箇所での安全指導の体制作り、活動場所への事前交渉など、学校全体で準備を進めていった。

当日の朝、各なかよしグループごとにカラータスキやカラー帽子をつけ、オープニング集会に集った。各なかよし担任と最終的な打ち合わせをする。特に交通安全のことや、無理をしないで時間内に戻ってくることを確認して送り出した。子供たちは6年生を中心に列を作り、地図を片手に出発していった。

事例3：なかよしピンク2班の場合

M男たちは、最初に春日神社へ出かけた。自分たちの持っている図鑑のコピーと鳥居の形を照らし合わせると、確かに一致した。思わず歓声が上がり、早速デジタルカメラで写真を撮った。次の秋葉神社では、また種類の違う形の鳥居であることが分かった。鳥居には、いろいろな形があることを驚きと感動で実感することができた。結局、5種類の形の中から4種類の鳥居を見つけてくることができた。

M男のワンダーカード

全部同じだと思っていた鳥居が、神社によってみんなちがうことが分かりました。1年生のKちゃんや3年のDもびっくりしていた。上手にまとめて発表したいです。

(4) 発表会をしよう！

ワンダーウォークから戻ったら、自分たちの発見してきたことを効果的にまとめて発表する。そうすることで体験を共有化し、自分たちの学びを振り返ることができる。

戻ってきたグループから、集めた情報を使って発表の準備を始めた。分かったことや思ったことを書いたり、写真や絵を貼ったりするグループが多かった。

発表を聞く視点として、よかったこと、分かったことなどを見つけ、伝え合うカードを用意した。子供たちは、他の子供の言葉を見て自分たちの発表に満足することができた。

事例4：なかよしピンク2班の場合

M男のグループはいろいろな種類の鳥居を見つけた後、そもそも鳥居とはどういう意味を持ち、形のちがいは何を意味するのかということに疑問を持ち始めた。もう一度インターネットを使って調べ、新たな追究をしていくことができた。

M男のワンダーカード

B紙にまとめていくうちに、2年生の子が、「鳥居って門のこと？ どうしてみんなちがうの？」って聞いてきた。ぼくは、6年生として、答えあげなくてはいけないと思って、インターネットで調べてみた。

M男のグループは、予想外の新たな発見ができた。まとめる活動の中で、新たな課題も見つけた。興味深いのは、どの疑問も低学年からの素朴な疑問であるということである。M男は、それに答えようとして、連続的な追究へと向かっていくことができた。

発表の時にはクイズ形式にし、鳥居の形を見せてどこの神社のものかを当ててもらおうようにした。

事例5：なかよしホワイト1班の場合

U子のグループは食草探しに出かけた。事前にインターネットや図書室の図鑑でかなりたくさん資料を集めて持っていった。しかし、実際に草を見ても本当に食べられるものなのかを見極めることができず、戸惑っていた。そこへ事前にU子のグループの活動を心配していたA先生が「これ、昔、食べたことがあるよ。」と投げかけ、タンポポをかじって見せた。それを見て、子供たちは一斉に動き始めた。おそろおそろ茎をかじってみては、「苦い」「おいしい」などと感想を言い始めた。また、3年生のH男がヨモギを見つけて「ぼくこの葉っぱで、前におだんごを作ったことがあるよ。」と言った。結局、資料から新たに見つけだすというより、経験からの食草探しになっていったが、それでも4種類ぐらいの食草を見つけてくることができた。A先生の支援をきっかけにして子供同士のかかわりが生まれ、価値ある体験活動へと広がっていった。見つけてきたタンポポやヨモギは、学校に戻ってからゆで、発表会の時に食べてもらう準備をすることができた。

事例6：なかよしグリーン2班の場合

Y男のグループはバードウォッチングをしてきた。アオサギやセグロセキレイなど、見つけた鳥をスケッチしてきたので、名前や特徴、見つけた場所などを表にまとめていった。分からなかったことはさらに図鑑で調べて書き込んでいった。発表の時には1年から6年まで順番に分かったことを発表していった。

ワンダーウォークをしてきたことで予想外の新たな発見があった。さらにそれをまとめる活動の中で、ま

た新しい課題を見つけることができた。このように、子供たちの学習対象への問題意識が、活動を通して連続的な追究へと駆り立てていったことは大きな成果と言えるだろう。

体育館で12のグループが協力し合って発表した。聞く側のポイントをはっきりさせておいたために、子供たちはよいところをたくさん見つけようとして各グループの発表を真剣に聞くことができた。書いたカードはその場で発表グループに渡した。受け取った子供たちは「声が大きくてよかったよ。」「楽しい話でした。紙芝居がおもしろかったよ。」などの評価を見て、自分たちの発表の良さを改めて実感することができ、活動に満足することができた。教師をはじめ、ワンダーウォークにかかわったワンダフルサポーターからの評価も取り込んで外部評価を行った。子供たちは大人から書かれた評価を見て、具体的に今後の活動への見通しを持つことができ、より一層意欲を高めることができた。

5. 平成15年度の実践

(1) 年間活動計画の作成

平成14年度の実践を振り返り、吟味を重ね、今後の課題を解決しながら15年度の年間活動計画を立てた。総合的な学習の時間のうち、高学年には18時間、中学年には16時間を当てることとした。低学年には総合的な学習の時間がないため、将来の総合的な学習にいざなうための準備の時間だと考え、学校裁量の時間をこれに当てた。

(2) 「なかよしワンダーウォーク」グループ別テーマ一覧

平成15年度には、12のグループが、「なかよしワンダーウォーク」に取り組んだ。12のグループのテーマは次の通りである。

「園児に昔の遊びを教えよう！」
 「ぼくらも和菓子職人！」
 「スペシャル自動販売機を作ろう — 『ナンバーワン』から『オンリーワン』へ—」
 「字名マップを作ろう」
 「生き物を大切にすることを学区に広めよう」
 「未来の岡小生に会いに行こう」
 「目の不自由な人の立場に立って、岡小学区を見つめよう」
 「身近な野鳥と仲良くなろう」
 「再発見!! 岡崎村」
 「学区の『ヒヤリハット』マップを作ろう」
 「おじいちゃんの喜ぶみそ汁 — 見直そう日本の

食文化—」

「まちのお店やさん パワーアップ大作戦 — ぼくらは地域いきいき隊—」

(3) 実践例1: 「ぼくらも和菓子職人！」

①追究素材について

岡崎学区には、約70年前から続く手作りの和菓子屋がある。その店があることは知っているが実際に買って食べたことのある子供は少ない。近頃では、工場で作られた和菓子を食べる機会が多く、手作りの和菓子のよさを知らない。実際の和菓子作りを自分の目で見たり、作る体験をしたり、食べたりする活動は、代々受け継がれている手作りの技のすばらしさを実感するのにふさわしい題材である。また直接、職人の話を聞くことで、職人の思いやこだわりにふれることができる貴重な体験である。この活動の中で、秋・冬と時期をずらして和菓子の種類などを調べることによって、和菓子は日本の四季と五感を大切にし、自分たちの暮らしに合わせて歩んでいることに気付かせていきたい。

和菓子作りを追究する活動を通して、日本には和菓子という伝統的なお菓子があることに気付き、子供たちの暮らしに少しでも近い存在になってくれればと願って単元を開発した。

②本テーマの目標

- ・地域にある和菓子屋での和菓子作りを通して、代々受け継がれている職人の技のすばらしさを友達と共に味わうことができる。(感じる力)
- ・和菓子について追究する活動を通して、和菓子屋の和菓子作りへの工夫や努力、手作りのよさ、職人の思いやこだわりについて考えることができる。(創り出す力)
- ・和菓子について追究する活動の中で、和菓子屋の人との温かな心の交流したり、なかよしグループの仲間と助け合ったりすることができる。(かかわる力)
- ・和菓子屋の人とのかかわり、和菓子の追究から得た和菓子への愛着、職人の思いへの共感、和菓子作りの技への感動を、地域や友達に発信することができる。(実現する力)

(4) 実践例2: 「学区の『ひやっとマップ』を作ろう」

①追究素材について

本校の東側の通学路は車の通りが激しい。しかし反対に南や西には田や畑が広がり、そこを通学路として使用している子供も多い。そのため全体としてみると、子供は比較的のんびりしており、交通事故に対する意識が乏しい。加えて、最近の忌まわしい事件報道や地震報道に対してものんびりと構えている子供が多い。

そんな折、学校の東に老人ホームが建設され、つち音が頻繁に響いている。それを知った子供たちの心には、つち音とともに、お年寄りのために何かをしてあげたいという思いが強まっていった。その中で、「安心して、この地域に住めるように学区の危ない場所を教えてあげたい」という具体的な願いを持つようになった。

こうして始まった危険な場所探しの活動を通して、子供たちは、ふだん何気なく歩いている地域の様々な場所を自分たちで考えた危険度判定基準を使って、なかよしワンダーウォークすることは、自分たちが暮らしている地域を安全でくらしやすいという視点で、もう一度見つめ直すことができると考えた。

②本テーマの目標

- ・なかよしワンダーウォークを通して、日ごろ歩いている通学路や地域の道路の中にさまざまな危険な場所があることに気付くことができる。(感じる力)
- ・自分たちで考えた危険度を判定する基準を使って地域の危険な場所をまとめ、『ひやっとマップ』を作ることができる。(創り出す力)
- ・『ひやっとマップ』作りの活動の中で、各学年の役割を自覚しながら、ワンダーウォークをしたりグループの仲間の考えを取り入れたりしながら話し合うことができる。(かかわる力)
- ・なかよしワンダーウォークで見つけた地域の危険な場所を『ひやっとマップ』にまとめ、友達や地域の人に伝えることができる。(実現する力)

6. 成果と今後の課題

(1) 成果

①地域から学ぶことを通して

地域は、子供にとって身近であり、親しみを持って追究することができるものである。繰り返しかかわることができることも、子供の学習意欲を持続させ、新たな課題を見つけるために有効であった。

地域には多くの協力者がいる。地域の方々は、地域をよく知るものとして登場し、保護者は、よき理解者として、また観察や調査活動、探検活動の安全を保証してくれる人として存在した。

まんじゅう作りに協力してくださった店の方は、定休日であるにもかかわらず店を開けて対応してくださった。学校の教育活動に日ごろから理解を示し、協力してくださる地域の人たちの心にもふれて、子供たちが学ぶものは大きかった。

子供同士の相互評価のみならず、地域の人や教師など大人からの外部評価が子供たちに活動の振り返りをさせることができ、次の活動の意欲を高めることができた。

子供たちは、地域から学ぶことを通して、一つは、自分が生まれ育った地域を見つめ、一つ一つ浮かんできた疑問を解決する中で、地域に愛着を感じ、時に誇りに思うようになってきた。今一つは、地域にかかわる人たちとかかわることを通して、他者の思いやりにふれ、自分たちへの温かい気持ちに触れることができた。このことは、子供たちの豊かな心を育むことにつながった。

テーマを設定する段階で、どうしたらいいのか戸惑うグループが多かったが、五感を使うテーマ、体験を重視したテーマなどバラエティーに富んだものがあった。なかよしワンダーウォークの中で新たに発見した驚きや喜びもあり、地域を見直すきっかけとなった。

②仲間とのかかわりの中で

学校の中で上級生に行き会うと、「あっ、なかよしグループのお姉ちゃんだ。」という声が聞こえるようになった。ワンダーウォークでより親密な関係になり、かかわりが豊かになっていることがうかがわれる。なかよしグループの上級生の言うことを素直に聞く姿も見られるようになった。上級生が下級生の面倒を見るのが当たり前になってきており、5年間継続して行っているなかよしグループを生かした取り組みの大切さを感じる結果となった。

2年生は1年生の兄姉として、教え、さすことを通して思いやりと優しさを身につけていった。教室では乱暴に振舞うことがある子供が、「虫取りの網と魚を取る網は違うから、間違えないようにするんだよ。」と、優しく1年生に教えている姿は、それを物語っている。1年生は、来年の自分の目標として2年生を意識するようになった。

3年生に発表の司会を任せて、6年生が優しく援助する姿が見られたり、高学年が低学年と手をつなぎながらワンダーウォークする姿があったり、子供たちのかかわりの姿が見られた。

なかよしワンダーウォークを通して、年齢に応じた役割を担う子供が増えてきている。低学年では高学年の子供の言うことをよく聞き、態度的にも模倣する場面が増えてきた。教えてもらう立場の経験を積んできたため、自分が成長して教える立場になった時には今年のリーダー像を思い描きながら、低学年の子供に優しく対応していけるであろう。

逆に、上学年の子供は、集団内でのリーダーとして下学年の子供に優しく接する中から、良いリーダーとはどうあるべきかを感じ取ったようである。また、下学年の子供が自分をよく見つめるようになったことを感じ取り、日常生活での行動も、高学年としての自覚を持った態度をとり始めている。

「なかよしワンダーウォーク」は、上学年は、自分たちの課題解決のために、よきリーダーでありたいと

がんばりを見せ、下学年は、それぞれに役割をもらい、自分の知りたいことを喜んで調べる姿があった。また、活動で身につけたことを、学級に戻ってからの学習に生かす姿が見られた。

同学年の友達とかかわる、異年齢の人とかかわるだけでなく、教師や外部講師、地域の人々とかかわることを通して、子供たちは、仲間の大切さ、人とかかわり方を身につけてきたと言える。なかよしワンダーウォークの発表会の時に相互評価をすることで、仲間の中で自分が存在する価値を見つけ、改めて仲間の大切さを感じるようになった。そこには、馴れ合いのなかよしではない、鍛えあう仲間が築かれつつある。

③自己実現を図る子供たち

生活科も総合的な学習も「振り返る」ことによって、自己実現を目指す。疑問や不思議に気付き、課題を見つけ、その疑問や課題を自分たちで追究し、まとめ、表現し、発信する。そして、また新たな疑問や課題を見つけていく。その過程で、自分の生活と関連付け、生き方を考えていく。それぞれ獲得していく力は違うであろう。だが、一人ひとりが自己実現を図っている姿であることには違いない。

今年の2年生の町探検では、なかよしワンダーウォークでの学びや経験が生かされ、ビデオを利用したり、発表の内容にかかわったクイズを用意したりなど、今までにない発表をする姿が見られるようになっていく。

各教室での総合的な学習の様子は、昨年までに比べて、子供たちが自主的な発想をし、それに基づいて追究していく姿が多く見られるようになってきた。学級、学年を含めて、それぞれのなかよしグループが、まとまった組織的な活動が行われるようになってきた。

生活科や総合的な学習において、子供たちの意識が「やらされている」から「自分たちが作り上げる」へと大きく変革できたことは大きな成果といえる。

(2) 今後の課題

今後は自己評価や相互評価をさらに効果的に取り入れ、子供の学びをより確かで深いものにしていきたい。

たとえば、今回の発表では発表時間にかかなりの差があったが、与えられた時間内に効果的にまとめる工夫も必要であろう。また、全校なかよし活動を取り入れた総合的な学習と生活科との有機的関連性についても、再度実践を見直し、活動のあり方を研究していく必要がある。

なかよしグループ編成について、多様な組み合わせをしていくことを念頭に置いて取り組んできたが、一人ひとりの児童の特性を配慮して、交流を組んでいくには至らなかった。今後もより系統立てた活動を、より日常的に実践していく方向でこの先も取り組んでい

くことにする。

おわりに

生活科と総合的な学習の時間を研究的に取り組んで5年目となった。この間、学年によって追究する対象の変更はあるものの、常に地域と仲間に着目して行ってきた。実践を積み重ねるにしたがって、子供たちは着実に変容してきたことを実感している。

教育課程の中で生活科や総合学習に与えられた時間は、決して多いといえない。だが、ここで得た力が、他教科・領域の中で生きて働くなら、大きな力となりうるだろう。

長い休みが終わって、2学期が始まった。例年になく残暑の中で、網とかごを持って、運動場南にある「なかよし草原」で虫を追う1、2年生の姿がある。ギロ川には、水の中の生き物を探し、水の汚れを心配そうに見る3年生、家から野菜くずを持ち寄ってうさぎの餌にしている4年生、綿の生長の様子を毎日見に行く5年生、学区と学校の歴史を来校者にたずねる6年生の姿がある。それぞれに、課題があり、解決の方策を考えている姿がそこにある。

本校では今、来年度にむけての教育課程の見直しを図っている。私たちは、本年度の全校なかよし活動を効果的に取り入れた総合的な学習における「なかよしワンダーウォーク」に見られた子供たちの主体的な創造活動の成果と子供たちの願いをふまえて来年度も総合的な学習に「なかよしワンダーウォーク」を位置付けたいと考えている。子供たちは、時間と場を保障さえすれば本来的にもっている好奇心と追究力を働かせて、より高いものを目指して主体的に活動するものである。今後も「全校なかよし活動」を効果的に取り入れた総合的な学習での子供たちを支援する立場から実践を重ね、吟味・検証していきたいと考える。